

第99回 令和7年10月8日（水）

理想と現実について。

どのような仕事にも理想のイメージ像があります。リーダーは高い志をもって理想を掲げることが必要ですし、組織全体がその理想像に共感できることが成功への近道です。

江戸時代の老中松平定信が大河ドラマで描かれています。この人物は清廉潔白を絵に描いたような人で、スーパークリーンな政治を目指していました。それと言うもの従来の田沼意次の政治は賄賂が横行する乱れた政治であると考えたからです。

近年この評価が逆になってきています。商業を重んじ、民衆に文化の発展を促した田沼意次の政治が評価され、反対に芝居も禁止、商業行為も倫理的には良くないとする松平定信の政治に疑問が投げかけられています。

松平定信の政治が世間の状況をあまり見ていないことは確かでしょう。幼少期より恵まれた暮らしをして町の様子を知らなかったのかもしれません。そのようなリーダーが掲げた理想像に人々がついていけないのも当然です。

現代も時の政治家が理想とする国家イメージを語ることがあります。これが国民の胸に響かないことがあります。言っていることは悪いわけではない。国民の生活が向上する政策であれば反対する理由はない。「本当に実現できるのか」この一言に尽きると思います。

結局理想を実現するための方略や具体性が見えてこない、画餅にしか過ぎない理想は薄く見えてしまいます。ポンチ絵とともに語られる理想を実現するとき「現場の裁量に任す」という言葉が魔法のように飛び交います。現場の自由度が失われることは避けたいのでこの言葉を否定するわけにはいきませんが、現場で起きる摩擦に対する方策が示されることはありません。

私は理想イメージとは誰もが常に頭に浮かぶもの、インパクトがあって覚えやすく文字情報が少ないものが良いと思っています。昔「郵政民営化」「自民党をぶっ壊す」を連呼して国民に大いにアピールした首相もいました。その評価の検証はさておき、イメージ効果は抜群だったと思います。

やたらと長い理想イメージが多いのですが、それが現場にどのような方法で、どのように着地するのか、もう少しわかりやすく方策を示せないものかなと思う今日この頃です。